

努力賞

小さな命からの「成長」

荒川区立赤土小学校四年

山中 咲季

こんにちは、わたしは、「ちょっとだけ」という本を読んで、「成長」という言葉を学びました。

この本に出てくる主人公のなっちゃんは、自分の家に赤ちゃんがやってきて、自分が、「お姉ちゃん」になった、ということ、実感します。お母さんが、赤ちゃんのお世話をする中、なっちゃんは、いつも、お母さんにやってもらっていることを、一人で一生けん命やりとげていきます。

この本は、昔、わたしの妹が生まれた時に、もらった本で、わたしの母は、小さいころの私と、なっちゃんを、重ね合わせて、

「なっちゃんみたいな思いをしているのかな。」とかわいそうになり、しばらくの間、この本を、読むことができなかったそうです。

わたしは今でも、この本を時々読みますが、わたしも、このようなことが、あったのかなと思うこともあります。

けれど、今では、妹も、小学生になり、わたしも、一人でできることが小さいころよりふえてきました。

わたしも小さいころのことは、よくおぼえていませんが、わたしの母は、わたしの小さいころの思い出や、写真などをよく見せてくれます。そういった思い出などを聞くと、小さいころの、思い出を、少し思い出すことがよくあります。

わたしが、自分で自分を「成長」したなと思っ

たときは、身長がのびたり、勉強などで、できなかった部分ができるようになったりすると、自分で「成長した」、「少し大人に近づいた」などと思うことがよくあります。

柳田先生も、兄弟はいますか、また、自分で自分が成長した、と思ったことは、ありますか。